

# 大学院博士課程において看護学を専攻する学生 に関する研究の現状

1982年から2002年に発表された研究の内容に焦点を当てて

亀岡智美<sup>1</sup>      中山登志子<sup>1</sup>      横山京子<sup>2</sup>  
山下暢子<sup>3</sup>      舟島なをみ<sup>4</sup>

1 国立看護大学校；〒204-8575 東京都清瀬市梅園 1-2-1    2 横浜市立大学看護短期大学部  
3 千葉大学大学院看護学研究科博士後期課程    4 千葉大学  
kameokat@adm.ncn.ac.jp

---

## Trends in Research of Doctoral Students in Nursing ; Focused on the Issues of them Published from 1982 to 2002

Tomomi Kameoka\*      Toshiko Nakayama      Kyouko Yokoyama  
Nobuko Yamashita      Naomi Funashima

\*National College of Nursing, Japan ; 1-2-1, Umezono, Kiyose-shi, Tokyo, 〒204-8575, Japan

**【Abstract】** The purpose of this study was to reveal trends and issues of previous researches on doctoral students in nursing, and to explore the direction for the future research in this area. To search research articles, computer data base software, IGAKUCHU-OZASSI and CINAHL were used. It was found that nineteen researches were conducted focused on the status of doctoral students in nursing, from 1982 to 2002 ; all of which were conducted in the U. S. The contents were analyzed qualitatively. First, the contents of each research were coded, and then, the codes were categorized based on the similarity. The trustworthiness of the data analysis was established through discussion among the co-researchers of this study. As a result, the following four categories showing the research areas of previous research on doctoral students in nursing were formed. 1. The experience of the students in doctoral program in nursing. 2. Students' evaluation of the doctoral program in nursing and the factors that influence it. 3. The Impact of doctoral studies in nursing on the students of doctoral study in nursing. 4. Promoting factors and obstacles in the learning activities of the doctoral students in nursing. The discussion about the above findings suggested that experiences of the doctoral students in nursing who had unique backgrounds should be explored, for example, students who are also faculties of the school of nursing. Furthermore it was suggested that promoting factors or preventing factors of learning activities of students in doctoral program in nursing who didn't have unique background should be explored.

---

**【Keywords】** 大学院 graduate education, 博士課程 doctoral program, 看護学教育 nursing education, 学生 student

### 1. はじめに

大学院博士課程は、自立した研究者の育成を目的とし<sup>1)</sup>、同課程における看護学教育は、自立した看護学研究者の育成につながる。看護学研究は、看護現象に焦点を当てた疑問や問題を解決するための系統的・組織的な探求であり<sup>2)</sup>、その成果産出と活用は、看護実践の質向上に必要不可欠である。大学院博士課程における看護学教育の発展は、自立した看護学研究者の育成と看護実践の質向上につながる重要な課題である。

大学院博士課程における看護学教育は、1924年、米国

のコロンビア大学ティーチャーズカレッジにおいて始まった。その後、米国には、次々と大学院が設置され、1999年、その数は70課程を越えた<sup>3)</sup>。一方、我が国の大学院博士課程における看護学教育は、1988年、聖路加看護大学大学院看護学研究科から始まった<sup>4)</sup>。その後、1993年、国立大学である千葉大学が大学院看護学研究科博士課程を設置し、1992年以降の看護師養成教育の大学化進展を背景とし、他の看護系大学における大学院博士課程の設置も進んだ。2002年現在、総数15課程が設置されている<sup>5)</sup>。これらは、その歴史、規模ともに、先進国である米国に比較し、我が国の大学院博士課程における看護学教育が発展の途上にあることを示す。

また、我が国の看護系大学院博士課程 15 課程における 1 学年あたりの定員総数は、142 名であり、この数は、看護職者の就業人口約 77 万人<sup>6)</sup>、看護基礎教育課程における 1 学年あたりの定員総数約 5 万人<sup>7)</sup>に比較し、著しく小さい。これは、我が国において、看護学教育を展開する大学院博士課程個々が、看護界全体と看護の対象となる人々に対し、重大な責任を負っていることを示す。

以上を背景とする本研究においては、大学院博士課程において看護学を専攻する学生に関する研究の一環として、学生の実態に焦点を当てた先行研究の内容解明を試みた。教育は、学生と教員が教育目標の達成をめざし相互行為を展開する過程<sup>8)</sup>であり、教育の対象であり学習の主体者である学生の理解は、教育目標の達成に向けて必要不可欠である。本研究の成果は、大学院博士課程における看護学教育の質向上に向け、同課程に在籍し学習活動を展開する学生を理解するための研究遂行上の課題を検討するための基礎資料となる。

## II. 研究目的

大学院博士課程における看護学教育の質向上に向け、同課程において看護学を専攻する学生の実態に焦点を当てた先行研究の内容を解明し、今後の研究遂行上の課題を検討する。

## III. 研究方法

### 1. データ収集

次の手続きにより本研究のデータとなる文献を選定、収集した。すなわち、第 1 に、医学中央雑誌を用い「博士」「看護」「学生」をキーワードとし、国内文献を検索した。検索期間は 1986 年から 2002 年とし、論文の種類を「原著論文」「会議録」に限定した。その結果、1 件の文献が検索されたが、これは、大学院博士課程における看護学教育に関する研究ではなかった。

第 2 に、CINAHL を用い、シソーラスにおいて「edu-

cation-nursing-doctoral」「student-nursing-doctoral」「doctorally-prepared-nurse」に分類される海外文献を検索した。検索期間は、1982 年から 2002 年までとし、論文の種類を「research」に限定した。その結果、94 件の文献が検索された。各文献の内容を検討した結果、94 件中 20 件が大学院博士課程において看護学を専攻する学生の実態に焦点を当てた研究論文であった。さらに、この 20 件のうち 2 件は、同一の研究者による同一の研究を博士論文および学術誌において発表したものであった。そこで、本研究においては、これらを 1 件として扱うこととした。すなわち、このようにして検索できた大学院博士課程において看護学を専攻する学生の実態に焦点を当てた研究論文 19 件を本研究の分析対象とした。

## 2. 分析

本研究と同様に先行研究の内容を解明した研究<sup>9)</sup>を参考とし、次の手続きにより分析した。

### 1) コード化

各文献を精読してその内容の要約を表す研究内容コードを作成した。

### 2) カテゴリ化

1) において作成した研究内容コードを意味内容の類似性に基づき分類した。

### 3) 本研究の信用性

コード化、カテゴリ化の信用性は、共同研究者間の検討により確保した。

## IV. 結果

### 1. 分析対象とした研究数と年次推移

1982 年から 2002 年までの 21 年間を検索した結果、大学院博士課程において看護学を専攻する学生の実態を解明した研究は総数 19 件存在し、全て米国の文献であった。また、このうち 7 件が博士論文であった。さらに、1985 年以前には研究が存在せず、1986 年以後、研究が発表されていない年もあったが、概ね 1 件から 3 件が発表されて

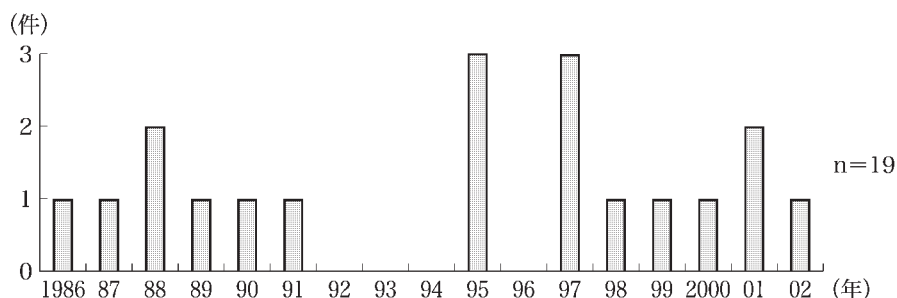


図 1 大学院博士課程において看護学を専攻する学生の実態を解明した研究数の年次推移

表1 大学院博士課程において看護学を専攻する学生の実態を解明した研究の内容(n=19)

研究内容コード(件数)	カテゴリ(件数, %)	
(1)博士課程への入学と学習開始に伴う学生の経験(1件)	1)博士課程における学習過程に生じる学生の経験(2件)	1. 博士課程における学生の経験(8件, 42.1%)
(2)博士論文作成過程とそれに伴う学生の経験(1件)		
(3)メンターとしての指導教員との相互行為に伴う学生の経験(1件)	2)博士課程における指導受理過程に生じる学生の経験(3件)	
(4)学生が教員と共に行なう活動とそれに伴う経験(1件)		
(5)メンターとしての指導教員との関係に対する学生の知覚(1件)		
(6)女性が博士課程の学習に専心することに伴う経験(1件)	3)博士課程における学習過程に生じる女子学生の経験(3件)	
(7)博士論文作成に専心し完遂する過程に伴う女子学生の経験(1件)		
(8)壮年期女子学生にとっての博士課程における学習の意味・経験(1件)		
(9)教員による論文式課題提示とその指導に対する学生の評価(1件)	4)博士課程における教育に対する学生の評価(3件)	2. 博士課程において提供される教育に対する学生の評価とそれに影響する要因(5件, 26.3%)
(10)夏期のみ開講の博士課程に対する学生の評価(1件)		
(11)1979年から1984年を通じた博士課程の教育に対する学生の評価の変化(1件)		
(12)在籍する博士課程の環境と教員・修了者の研究活動の活発さの関係に対する学生の知覚(1件)	5)博士課程における学習環境に対する学生の評価(1件)	
(13)学生の心理社会的特性と教育に対する満足感の関係(1件)	6)博士課程における教育に対する学生の評価に関わる要因(1件)	
(14)「将来教育職に就くこと」に対する学生の態度の入学後の変化(1件)	7)博士課程における学習が学生の職業観に与える影響(2件)	3. 博士課程における学習が学生に与える影響(3件, 15.8%)
(15)博士課程における学生の職業上の最終目標設定におよぼす影響(1件)		
(16)DNSc・EdD・PhDプログラムにおける学生の知覚に関する比較(1件)	8)博士課程における学習が学生の知覚に与える影響のプログラム別比較(1件)	4. 博士課程学生の学習促進要因・阻害要因(3件, 15.8%)
(17)学生の学業継続意志に影響する学士・修士・博士課程間の比較(1件)	9)学習促進要因の学士・修士・博士課程間の比較(1件)	
(18)博士課程に在籍し学位取得をめざす教員のストレスに関わる要因(1件)	10)特定の背景を持つ博士課程学生の学習阻害要因(2件)	
(19)留学生の学習の実態と学習上の障害(1件)		

注：網かけは、博士論文として発表された研究であることを示す。

いた(図1)。

## 2. 大学院博士課程において看護学を専攻する学生の実態を解明した研究の内容

分析対象となった研究19件の内容を検討し、研究内容コード19を得た。また、この19コードを意味内容の類似性に基づき分類した結果、4カテゴリが形成された(表1の1から4)。以下、これら4カテゴリ各々に関する結果を述べる。

### 1)【1. 博士課程における学生の経験】(8件:42.1%)

このカテゴリは、大学院博士課程において看護学を専攻する学生の理解に向け、その経験を解明した研究から形成された。このカテゴリを形成した研究内容コードは8件の研究から得られたものであり、これは全研究数の42.1%に該当した。8件中3件は博士論文、5件は学術誌掲載論文であった。

また、研究の具体的内容は、3種類に分類できた。第1は《1)博士課程における学習過程に生じる学生の経験》であり、これに該当する研究は、大学院博士課程への入学と学

習の開始、博士論文の作成過程に伴う学生の経験に着目していた。第2は《2)博士課程における指導受理過程に生じる学生の経験》であり、これに該当する研究は、指導教員による学生へのメンターシップ、学生が指導教員と共に行なう活動に着目していた。第3は《3)博士課程における学習過程に生じる女子学生の経験》であり、これに該当する研究は、女子学生が博士課程における学習に専心し、博士論文を作成する過程に伴う経験や壮年期という発達段階に着目していた。

#### 2) 【2. 博士課程において提供される教育に対する学生の評価とそれに影響する要因】(5件：26.3%)

このカテゴリは、大学院博士課程における看護学教育の改善に向け、学生による評価とその影響要因を解明した研究から形成された。このカテゴリを形成した研究内容コード数は5件の研究から得られたものであり、これは全研究数の26.3%に該当した。5件中1件は博士論文、4件は学術誌掲載論文であった。

また、研究の具体的内容は、3種類に分類できた。第1は《4)博士課程における教育に対する学生の評価》であり、これに該当する研究は、論文式課題の提示という特定の教授方略、夏期のみを開講する特別なカリキュラムに対する学生の評価、あるいは6年間という一定の期間を通じた学生の評価の変化に着目していた。第2は《5)博士課程における学習環境に対する学生の評価》であり、これに該当する研究は、学生が、自分自身にとっては学習環境である博士課程の環境を教員や修了者の研究活動の活発さとどのように関連づけてとらえているかに着目していた。第3は《6)博士課程における教育に対する学生の評価に関わる要因》であり、これに該当する研究は、学生の心理社会的特性と教育に対する満足感の関係を探索していた。

#### 3) 【3. 博士課程における学習が学生に与える影響】(3件：15.8%)

このカテゴリは、大学院博士課程における看護学教育の効果の評価に向け、同課程における学習が学生に与える影響を解明した研究から形成された。このカテゴリを形成した研究内容コードは3件の研究から得られたものであり、これは全研究数の15.8%に該当した。3件中1件は博士論文、2件は学術誌掲載論文であった。

また、研究の具体的内容は2種類に分類できた。第1は《7)博士課程における学習が学生の職業観に与える影響》であり、これに該当する研究は、大学院博士課程における学習に伴い、学生の将来教育職に就くことへの態度、職業上の最終目標がどのように変化するかに着目していた。第2は《8)博士課程における学習が学生の知覚に与える影響のプログラム別比較》であり、これに該当する研究は、看護学教育を行なう大学院博士課程の中に看護学博士(DNSc)、教育学博士(EdD)、学術博士(PhD)という授与

される学位の異なるプログラムが存在することに着目し、各プログラムにおける学習が学生の知覚に与える影響を探索していた。

#### 4) 【4. 博士課程学生の学習促進要因・阻害要因】(3件：15.8%)

このカテゴリは、大学院博士課程において看護学を専攻する学生の効果的な学習支援に向け、学習の促進要因・阻害要因を解明した研究から形成された。このカテゴリを形成した研究内容コードは3件の研究から得られたものであり、これは全研究数の15.8%に該当した。3件中2件は博士論文、1件は学術誌掲載論文であった。

また、研究の具体的内容は2種類に分類できた。第1は《9)学習促進要因の学士・修士・博士課程間の比較》であり、これに該当する研究は、退学者の増加を背景とし、学士課程・修士課程・博士課程に在籍する学生の学業継続意志に影響する要因を探索していた。第2は《10)特定の背景を持つ博士課程学生の学習阻害要因》であり、これに該当する研究は、看護学教員として職業を継続しつつ博士課程に在籍して学位取得をめざす学生、他国からの留学生といった学生の背景に着目し、ストレスや学習上の障害を探索していた。

## V. 考察

### 1. 研究数からみた大学院博士課程において看護学を専攻する学生の実態解明の現状と課題

本研究の結果は、1982年から2002年までの21年間に、大学院博士課程において看護学を専攻する学生の実態を解明した研究が総数19件存在することを明らかにした。我が国の主要看護系学会において発表された研究を分析した結果<sup>10)</sup>によれば、1994年から1998年の5年間に総数1,307件の看護学教育研究が行なわれており、その12.1%に該当する158件が学生に関する研究であった。また、米国の博士論文を分析した結果<sup>11)</sup>によれば、1989年から1994年の6年間に総数366件の看護学教育研究が行なわれており、その9.3%に該当する34件が看護基礎教育課程に在籍する学生の実態に焦点を当てた研究であった。これら先行研究の結果との対比は、大学院博士課程に在籍する学生の実態を解明した研究の絶対数の少なさを表す。

大学院博士課程は、文字通りの最高学府たる教育機関であり、修了者には、将来、社会的な貢献が大きく期待される<sup>12)</sup>。大学院博士課程がこのような社会からの期待に応えるためには、教育対象となる学生を適切に理解することが大前提であり、同課程において看護学を専攻する学生の実態を解明する研究をさらに推し進めることは、今後の重要な課題である。

また、本研究の結果は、大学院博士課程において看護学

を専攻する学生の実態を解明した19件の研究全てが米国の研究であることを明らかにした。これは、我が国においてこの領域の研究が未着手であることを意味する。我が国の大学院博士課程における看護学教育は開始から既に15年が経過し<sup>13)</sup>、看護基礎教育の大学化を背景とし、今日においてもその数が増加傾向にある<sup>14)</sup>。大学院博士課程において看護学を専攻する学生への研究成果に基づく効果的な教育的支援提供に向け、その実態解明に早急に着手する必要がある。

## 2. 研究内容からみた大学院博士課程において看護学を専攻する学生の実態解明の現状と課題

本研究の結果は、大学院博士課程において看護学を専攻する学生の実態を解明した研究の内容が、【1. 博士課程における学生の経験】【2. 博士課程において提供される教育に対する学生の評価とそれに影響する要因】【3. 博士課程における学習が学生に与える影響】【4. 博士課程学生の学習促進要因・阻害要因】の4種類に分類できることを明らかにした。これは、大学院博士課程において看護学を専攻する学生の実態解明が、これら4領域から進展していることを示す。また、これら4領域には全て、1件から3件の博士論文が含まれていた。大学院博士課程に在籍する学生の取り組んだ論文が博士論文として承認されるためには、その論文が、研究としての精度の高さや独自性に加え、学術的知識の発展に対する高い貢献度を備えている必要がある<sup>15)</sup>。本研究の結果明らかになった4領域全てに博士論文が含まれていたことは、各々が学術的意義の高い研究領域であることを示す。

また、4領域のうち【1. 博士課程における学生の経験】は、大学院博士課程において看護学を専攻する学生の理解に向け、その経験を解明した研究8件から形成された。また、この領域の研究は、博士課程における学習開始や博士論文作成といった学習過程、あるいはそれに伴う指導受理過程に生じる学生の経験、女子学生の経験に着目して行なわれていた。これらは、大学院博士課程において看護学を専攻する学生の経験が多様な視点から解明されつつあることを示す。経験とは「主体としての人間が過去の事実を主体の側から見た内容」<sup>16)</sup>であり、大学院博士課程において看護学を専攻する学生に起こっている事実は、学習者である学生自身の視点から解明されつつあるとも換言できる。

一方、領域【4. 博士課程学生の学習促進要因・阻害要因】は、大学院博士課程において看護学を専攻する学生の効果的な学習支援に向け、学習の促進要因・阻害要因を解明した研究3件から形成された。また、この領域の研究は学士・修士・博士課程間の比較、留学生、看護学教員として職業活動を営みつつ博士の学位取得をめざす学生等の特定の背景を持つ学生に着目していた。

これら2領域の研究は、いずれもその成果を学生を理解するための直接的な資料として活用できるという共通性を持ち、米国の大学院博士課程における看護学教育の次のような特徴を背景に行なわれている可能性が高い。

その第1は、大学院博士課程における学習、最も重要な学習課題であり修了要件でもある博士論文の完成が学生にとって決して容易ではなく、効果的な支援が不可欠となっていることである。先行研究は、我が国の主要看護系学会において発表された研究<sup>17)</sup>、米国の博士論文<sup>18)</sup>に焦点をあて、看護基礎教育課程の学生に関する研究の動向を明らかにした。これら2つの研究結果によれば、特定の学習課題に取り組む過程に伴う学生の経験に着目した研究は、看護基礎教育課程の学生に関する研究には存在しない。これは、博士論文の作成が大学院博士課程を特徴づける学習課題であることを示唆する。また、多くの文献が学部や修士課程教育との相違<sup>19)</sup>、困難さ<sup>20)</sup>を指摘し、米国における1年間の入学者数約3,000名に対し修了者数が約430名という現実<sup>21)</sup>も存在する。これらも、大学院博士課程における学習、博士論文の作成が学生にとって決して容易ではなく、効果的な支援が不可欠であることを裏づける。

第2は、大学院博士課程における看護学教育の目標を達成するために、学生と指導教員との相互行為・関係性が重要ということである。先述した看護基礎教育課程の学生に関する我が国の研究<sup>22)</sup>、および米国の博士論文<sup>23)</sup>を分析した結果によれば、教員からの指導受理過程に着目した研究も、看護基礎教育課程を対象にした研究には存在しない。これは、教授者である教員との相互行為や関係性が、大学院博士課程の特徴に深く関連する事項であることを表す。実際に、多くの文献が、大学院博士課程に在籍する学生と指導教員とのメンターシップの重要性を強調している<sup>24)</sup>。メンターシップとは「時間の流れに伴って広がっていく発展的、エンパワリング的、養育的關係」<sup>25)</sup>である。メンターである指導教員は、学生に対し擁護者、支持者、教師、相談者といった役割をとる<sup>26)</sup>。大学院博士課程の学生にとって指導教員とのメンターシップ形成は、自己の可能性の開花と目標達成に挑戦することへの支援となるとともに、リーダーシップ能力や自尊心、肯定的態度の獲得につながる<sup>27)</sup>。また、これは学生自身が次の世代のメンターとなることにも結びつき<sup>28)</sup>、このような関係性は、主に学生と指導教員の共同による研究活動を通して深まっていく。

第3は、大学院博士課程において看護学を専攻する学生の中に、社会的に多様な役割を担っている成人期の女性が多く存在する一方、多様な背景を持つ者が存在することである。例えば、米国の看護系大学院博士課程42課程に在籍する学生401名から収集したデータを分析した結果<sup>29)</sup>は、対象者の平均年齢が42歳、平均臨床経験年数が18年であることを示した。また、対象者の平均年齢が47歳、

93.3%が結婚して子どもを持っていたという他の研究結果<sup>30)</sup>も存在する。さらに、留学生に関する研究結果<sup>31)</sup>は、研究に協力した米国の看護系大学院博士課程24課程全てに留学生が在籍しており、1999年度におけるその総数が184名であることを示した。加えて、ある研究<sup>32)</sup>は、大学看護学部107校の学部長を通し、博士課程に学生として在籍している看護学教員の研究協力を募り、167名から承諾を得たことを明らかにした。

看護基礎教育課程の学生に関する我が国の研究<sup>33)</sup>の中には、このような学生の背景に着目したものは存在しなかった。また、米国の博士論文を分析した結果<sup>34)</sup>は、看護基礎教育課程の学生に関しても、看護師免許を持つ学生や少数民族の学生等、学生の特定の背景に着目した研究が多数存在する一方、成人期の女子学生に着目した研究が34件中1件であることを示した。これらは、大学院博士課程における看護学教育においても、看護基礎教育課程と同様に、学生個々の背景に適した支援が課題であるとともに、学生の多数を占める社会的に多様な役割を持つ成人期女性であるという特性が、大学院博士課程の学習に強く影響することを示唆する。

以上3点に照らし、我が国の状況を検討すると、いくつかの資料<sup>35,36)</sup>は、大学院看護学研究科博士後期課程入学者に対する修了者の割合が50%台に留まっていることを示す。我が国においても、同課程における学習、博士論文の作成が、学生にとって容易には達成できない課題である可能性がある。また、学生は、博士論文の作成に加え、指導教員が組織する研究プロジェクトへのメンバーとしての参加<sup>37,38)</sup>、ティーチングアシスタントやリサーチアシスタントとしての役割遂行<sup>39)</sup>を通し、その研究能力を高めている。これは、我が国の博士課程において看護学を専攻する学生にとっても、指導教員との相互行為や関係性が目標達成に向けた鍵となっている可能性を示唆する。さらに、看護職者の圧倒的多数が女性であることや、社会的に多様な役割を担う成人期の女性という特性を持つ学生が大学院博士課程に多いことは入学要件に照らし容易に推察できる。加えて、学生として在籍しつつ大学院設置基準第14条<sup>40)</sup>の適用により職業活動を継続している者や、学校教育法施行規則第70条<sup>41)</sup>の適用により学士の学位なく大学院修士課程(博士前期課程)に学び、博士後期課程に進学した者など、多様な背景を持ち学習している学生も存在する。

これらは、我が国の大学院博士課程における看護学教育が米国と同様の特性を持ち、学生にも類似した状況が生じている可能性を示唆する。しかし、既に述べた通り、我が国において大学院博士課程における看護学教育に関する研究は未着手である。

我が国は、文化的背景も看護学教育の歴史・現状も米国と異なる。また、緒言に述べた通り、大学院博士課程にお

ける看護学教育の社会的責任は重大であり、その歴史は既に15年を越えている。我が国においても、大学院博士課程における看護学教育の実態を、学生の人口統計学的特徴、入学者数・修了者数等を含めて正確に把握するとともに、在籍する学生の経験や学習促進要因・阻害要因を解明する研究に早急に着手する必要がある。

加えて、【1. 博士課程における学生の経験】に関する研究の中には、【4. 博士課程学生の学習促進要因・阻害要因】に関する研究に包含された博士課程に在籍し学位取得をめざす教員、留学生といった特定の背景を持つ学生に焦点を当てた研究が存在しなかった。これら特定の背景を持つ学生は、固有の経験をしている可能性が高く、その解明も今後の課題である。その一方、対象を特定の背景を持つ学生から代表的な学生へと拡大し、【4. 博士課程学生の学習促進要因・阻害要因】を解明することも残された課題である。

残る2領域のうち、【2. 博士課程において提供される教育に対する学生の評価とそれに影響する要因】は、大学院博士課程における看護学教育の改善に向け、学生による評価とその影響要因を解明した研究5件から形成された。また、この領域の研究は、特定の教授方略やカリキュラムに対する学生の評価、教育に対する学生の評価の一定期間を通じた変化に着目するとともに、学習環境に対する評価、学生の教育に対する評価に関わる要因に着目していた。

一方、【3. 博士課程における学習が学生に与える影響】は、大学院博士課程における看護学教育の成果の評価に向け、同課程における学習が学生に与える影響を解明した研究3件から形成された。また、この領域の研究は、大学院博士課程における学習が学生の職業観に与える影響、プログラムによる相違に着目していた。

これら2領域の研究は、いずれも、その成果を大学院博士課程における看護学教育を評価する際の直接的な資料として活用できるという共通性を持ち、大学院博士課程における教育の質向上に向けて、学生を主体者とする教育評価が必然であることを示す。また、これらの研究は、米国の大学院博士課程における看護学教育の次のような特徴を背景として行なわれている可能性が高い。

その第1は、大学院博士課程における看護学教育を通し優れた研究者、実践者を輩出するという社会的責任の重大性である。【3. 博士課程における学習が学生に与える影響】という領域は、博士課程における学習の成果に関連する。看護基礎教育課程の学生に関する我が国の研究<sup>42)</sup>を分析した結果によれば、対象文献の中にこれに該当する研究は存在しなかった。また、看護基礎教育課程の学生に関する米国の博士論文を分析した結果<sup>43)</sup>によれば、対象文献の中に「学生の学習成果に関する研究」という領域が存在し、7件の研究が行なわれていた。しかし、それらは全て学習成果として学生の成績に着目しており、学生の職業観に与

える影響という観点からの研究ではなかった。

職業観とは、職業に対する個々人の認識であり、「職業をどんなものと理解し、どんな職業を望ましいと思ひ、職業的機能のどれにコミットし、自分の生き方の中に職業をどう位置づけるべきと考えるか」といったことが、その内容になる<sup>44)</sup>。本研究の対象文献の中に、学習が学生の職業観に与える影響という観点から成果を探究した研究が存在したことは、大学院博士課程における看護学教育の目標が学生の修了後の職業活動に対する明確な期待と関連し、その達成状況の把握が、大学院博士課程において看護学教育を行なう意義とその社会的貢献について評価するために不可欠であることを示唆する。実際、学習が学生の職業観に与える影響に着目した研究<sup>45,46)</sup>は、博士課程修了者に対する将来の看護学教員としての期待の存在を大前提とし、大学院博士課程における看護学教育がその期待に対応するものとなっているかを探究していた。また、米国の大学院博士課程における看護学教育は、博士の学位を持つ看護職の輩出がその保健医療システムにおける地位と権威の確保につながるという観点から、必要性を主張され、発展してきた<sup>47)</sup>。今日、その目的は主に次の2点であることに合意が得られている<sup>48)</sup>。それは、研究者として看護学の知識の発展に寄与する人材、および、実践者として研究成果を活用し看護の質の向上を実現する人材の育成であり、学生には、将来、大学の教員もしくは保健医療機関における看護管理者となり、リーダーシップを発揮することが期待されている<sup>49)</sup>。

第2は、看護学教育を行なう大学院博士課程における多様な学位授与プログラムの存在である。米国には、看護学教育を行なう大学院博士課程(doctoral program in nursing)の中に、修了後授与される学位により、教育学博士(EdD)プログラム、看護学博士(DNSc)プログラム、学術博士(PhD)プログラムをはじめ、多様なプログラムが存在する<sup>50)</sup>。また、これら各プログラムの特徴、共通点・相違点については十分に明確になっておらず、どのプログラムが大学院博士課程における看護学教育にとって最適かについての議論が続いている<sup>51)</sup>。

以上の2点に照らし、我が国の状況を検討すると、大学院博士課程において看護学を専攻する学生の将来に対する社会からの期待の大きさは、米国と同様である。我が国における大学院博士課程看護学研究科の創設期、多くの看護職者が、異口同音に、看護学の発展、および高い教育・研究能力を備えた看護学教員、質の高い看護を提供できる看護職者の質的・量的確保に向け、大学院博士課程における教育の必要性を主張している<sup>52-54)</sup>。

本稿冒頭にも述べた通り、看護系大学院の入学定員は、全国の看護職者という母集団に対し極めて低い割合である。また、大学院博士課程における教育に要する費用は、

修士課程、学士課程に比較して著しく多く、例えば、文部科学省が国公立大学の学生一人あたりに対し配分する予算は、博士課程が修士課程の約1.5倍、学士課程の約5倍となっている<sup>55)</sup>。これは、看護職者全体からみれば極めて少数である大学院博士課程の学生に対し、多くの費用が投入されていることを意味し、大学院博士課程における看護学教育が上述の期待に応えられる優れた人材を輩出することを重大な責務としていることを示す。大学院博士課程における看護学教育の評価をこのような観点から継続的に実施することも、今後の課題である。

また、我が国の看護系大学院博士課程には、米国と同様に多様なプログラムが存在する。例えば、現在設置されている15課程の中には、看護学研究科、医学系研究科、保健衛生学研究科、健康生活科学研究科、看護福祉学研究科、医療福祉学研究科という6種類の研究科が存在する。医学系研究科においては、さらに、保健学専攻、看護学専攻の2種類が存在する。研究科は大学院における教育研究上の基本組織であり、専門分野に応じて組織される<sup>56)</sup>。これは、研究科の種類の違いが、その専門分野の違いを表すことを意味し、専門分野の違いは教育目的や内容、さらには学生の学習過程や成果の違いに反映される可能性が高い。看護系大学院博士課程が、自立した看護学研究者を育成するという第一義的目的を達成するとともに、教育・研究・実践に貢献できる人材を輩出するための研究科のあり方の検討に向け、今後、これら多様に存在する研究科相互における教育の相違や各々の特徴を解明することも必要である。

## VI. 結 論

本研究を通し、次の6点の結論を得た。

1. 大学院博士課程において看護学を専攻する学生の実態を解明した研究は、1982年から2002年までの21年間に総数19件存在した。その研究内容は、【1. 博士課程における学生の経験】【2. 博士課程において提供される教育に対する学生の評価とそれに影響する要因】【3. 博士課程における学習が学生に与える影響】【4. 博士課程学生の学習促進要因・阻害要因】の4種類に分類できた。

2. 大学院博士課程において看護学を専攻する学生の实態に関する研究は、我が国において未着手であり、研究成果に基づく学生への効果的な支援に向け、早急に着手する必要がある。

3. 我が国の大学院博士課程における看護学教育の質向上に向け、その実態を、学生の人口統計学的特徴、入学者数・修了者数等を含めて正確に把握するとともに、学生の経験や学習促進要因・阻害要因を解明する研究を進める必要がある。

4. 大学院博士課程における特定の背景を持つ学生の経験、特定の背景を持たない代表的な学生の学習促進要因・阻害要因は未解明であり、今後、研究が必要である。

5. 大学院博士課程における看護学教育の使命達成に向け、社会に貢献する優れた看護職者の輩出という観点から、その教育評価を継続的に実施する必要がある。

6. 看護系大学院博士課程が、自立した看護学研究者を育成するという第一義的目的を達成するとともに、教育・研究・実践に貢献できる人材を輩出するための研究科のあり方の検討に向け、今後、我が国の看護系大学院に存在する多様な研究科相互における教育の相違や各々の特徴を解明する必要がある。

#### ■文献

- 1) 市川須美子 他編：教育小六法〈平成15年版〉，学陽書房，241，2003.
- 2) Polit, D. F. & Hungler, B. P. : Nursing research ; Principles and methods, Lippincott, 731, 1999.
- 3) Current strengths and limitations of doctoral education in nursing : Are we prepared for the future?, Journal of Professional Nursing, 16(4), 191-200, 2000.
- 4) 看護行政研究会監修：看護六法〈平成15年版〉，新日本法規，1234，2003.
- 5) 前掲書4)，1229-1231.
- 6) 前掲書4)，1220-1221.
- 7) 前掲書4)，1226-1228.
- 8) 舟島なをみ：看護教育学研究—発見・創造・証明の過程，医学書院，2，2002.
- 9) 山下暢子 他：1994年から1998年における看護学実習に関する研究内容の分析—学生を対象とした研究に焦点を当てて，看護教育学研究，12(1)，29-36，2003.
- 10) 定廣和香子・舟島なをみ・亀岡智美 他：日本における看護学教育研究の動向と課題，第7回中日護理学術交流会議論文匯編，112-114，2001.
- 11) 小林小百合・亀岡智美：看護学生に関する研究，連載：米国の博士論文にみる看護学教育研究の動向[7]，Quality Nursing, 4(1)，55-63，1998.
- 12) Carpenter, D. R. et al. : On doctoral education in nursing : The voice of the student, NLN Press, 61-65, 1996.
- 13) 前掲書4)，1234-1235.
- 14) 前掲書4)，1229-1231.
- 15) 前掲書12)，107.
- 16) 見田宗介 他編：社会学事典，経験の項，弘文堂，245，1988.
- 17) 小林小百合・安齋由貴子：看護学生に関する研究動向と今後の課題，看護教育，35(8)，630-634，1994.
- 18) 前掲書11).
- 19) Urbano, M. T. et al. : A developmental approach to doctoral education, Journal of Nursing Education, 25(2)，76-78，1986.
- 20) Rush, M. M. : Innovative roles : Doctoral student, Journal of Addictions Nursing, 8(1)，40-41，1996.
- 21) 前掲3)
- 22) 前掲17)
- 23) 前掲11)
- 24) Stevens, K. R. et al. : Evidence-based teaching ; Current research in nursing education, Jones and Bartlett Publishers, Inc., 36-46, 1999. 杉森みど里監訳：エビデンスに基づく看護学教育，33-37，医学書院，2003.
- 25) 前掲書24)，24；20.
- 26) 前掲書12)，72.
- 27) Davidhizar, R. E. : Mentoring in doctoral education, Journal of Advanced Nursing, 13, 775-781, 1988.
- 28) 前掲書27)，775-781.
- 29) Hudacek, S et al. : Student perceptions of nurse doctorates ; Similarities and differences, Journal of Professional Nursing, 14(1)，14-21，1998.
- 30) Welham, B. J. L. : Female student's perceptions of factors influencing their decision to persist in a nursing education program, Doctoral Dissertation, School of Nursing, Widener University, 2000.
- 31) Carty, R. et al. : Opportunities in preparing global leaders in nursing, Journal of Professional Nursing, 18(2)，70-77，2002.
- 32) Kenty, J. R. : Matching social support and stress ; An investigative study of female nursing faculty pursuing doctoral study, Doctoral Dissertation, The University of Connecticut, 1995.
- 33) 前掲17)
- 34) 前掲11)
- 35) 菱沼典子：聖路加看護大学大学院看護学研究科の軌跡と展望，Quality Nursing, 6(1)，10-15，2000.
- 36) 濱田悦子 他：日本赤十字看護大学大学院看護学研究科について，Quality Nursing, 6(3)，10-17，2000.
- 37) 舟島なをみ：[千葉大学大学院看護学研究科の教育・研究内容]看護教育学教育・研究分野，Quality Nursing, 6(2)，19-24，2000.
- 38) 萱間真美：今日における質的研究への期待 共同研究において求められる役割，看護研究，36(5)，3-12，2003.
- 39) 野口美和子：千葉大学大学院看護学研究科について，Quality Nursing, 6(2)，10-18，2000.
- 40) 前掲書1)，242.
- 41) 前掲書1)，148.
- 42) 前掲17)
- 43) 前掲11)
- 44) 森岡清美 他編：新社会学辞典，職業観の項，有斐閣，752，2000.
- 45) Zebelman, E. S. : Attitude change towards faculty careers during the socialization experience in nursing doctoral program, Doctoral Dissertation, University of Washington, 1988.
- 46) Zebelman, E. S. et al. : Student career goal changes during doctoral education in nursing, Journal of Nursing Education, 28(2)，53-60，1989.
- 47) Grace, H. K. : The development of doctoral education in nursing ; The historical perspective, Journal of Nursing



- Education, 17(4), 17-27, 1978.
- 48) Brady, P. F. : Perceptions of need for doctoral education by selected nurses in five midwestern states, Doctoral Dissertation, University of South Dakota, 1-2, 1989.
- 49) Shores, L. S. : Analysis of decisions to initiate doctoral programs in nursing, Nurse Educator, 11(1), 26-30, 1986.
- 50) 前掲書 12), 33-56.
- 51) 前掲書 29)
- 52) 杉森みど里 : 看護学教育における博士課程の必要性—28
- 年前の幻の大学院の誕生と消滅が意味するもの, 看護教育, 32(3), 164-173, 1991.
- 53) 平山朝子 : 我が国における看護学の大学院博士課程への期待, 看護教育, 32(10), 604-611, 1991.
- 54) 南裕子 : 日本における大学院教育に求められるものとその背景, 看護研究, 23(1), 112-118, 1990.
- 55) Clark, B. R. et al. (潮木守一監訳) : 大学院教育の時代, 東信堂, 432, 1999.
- 56) 前掲書 1), 242.

**【要旨】** 本研究の目的は、大学院博士課程における看護学教育の質向上に向け、同課程において看護学を専攻する学生の実態に焦点を当てた先行研究の内容を解明し、今後の研究遂行上の課題を検討することである。この目的達成に向け、医学中央雑誌、CINAHLを用い、1982年から2002年までの文献を検索した。その結果、大学院博士課程において看護学を専攻する学生の実態に焦点を当てた19件の研究を検索でき、これを分析対象とした。分析においては、まず、各文献を精読してその内容の要約を表す研究内容コードを作成した。続いて、作成した研究内容コードを意味内容の類似性に基づきカテゴリ化した。なお、コード化、カテゴリ化の信用性は、共同研究者間の検討により確保した。研究結果は、分析対象となった研究19件が全て米国の研究であることを明らかにした。これは、我が国において研究が未着手であることを示し、今後、研究成果に基づく効果的な学習支援に向け、大学院博士課程において看護学を専攻する学生の実態に焦点を当てた研究に早急に着手する必要性を示唆した。また、19件の研究内容の検討から19コードを得、これらは4カテゴリを形成した。この4カテゴリとは、【1. 博士課程における学生の経験】【2. 博士課程において提供される教育に対する学生の評価とそれに影響する要因】【3. 博士課程における学習が学生に与える影響】【4. 博士課程学生の学習促進要因・阻害要因】である。これらの結果に対する考察は、教員として職業活動を行ないつつ博士課程に在籍する学生など特定の背景を持つ学生の経験、特定の背景を持たない代表的な学生の学習促進・阻害要因の解明などが今後必要であることを示唆した。